

ビバハウス便り NO.78 日本臨床教育学会 第1回研究大会 に参加して

青少年自立支援センター ビバハウス

日本臨床教育学会会員 安達 尚男

同北海道支部会員 安達 俊子

春から今まで、今年ほど異常気象という言葉が使われた年はなかった。その関係もあるのか、紅葉がなかなか来ない。紅葉がくれば、その後いきなり雪になり、冬に突入かとのいやな予感もある。

札幌にも熊出没のニュースが頻繁だが、ビバハウスの玄関近くまで昨夜は狐が来た。猫のラミちゃんと犬のビバがそろってただならぬ唸り声を上げて、山に追い返してくれた。お母さん狐も、子どもたちのため我が身の危険も顧みず、えさを求めに来たのだろう。

10月1, 2日、北海道教育大学札幌校を会場に開かれた日本臨床学会第1回研究大会に2人で参加した。印象の鮮明なうちに、この大会で最も強く感じたことを短くまとめてみたい。

日本でもおよそ4半世紀の歴史を持つといわれる『臨床教育学』ではあるが、本学会の発足が本年3月19日であることだけでも明らかなように、まさにこの学会は、3・11 東日本大震災および其れに伴う福島原発大爆発事故が、激痛の中から時代の最緊急の要請に応じて誕生させたものでもある。

東日本大震災の後遺症更に福島原発事故のもたらす今後長期に及ぶ日本国民と子どもたちの生存の危機から彼らを守りぬくために、この学会はまさに設立されたものであるとの実感を強く直に大会に参加して感じた。

大会の中で、田中孝彦学会長の、基調報告『臨床教育学の思想と研究スタイルについて』でも明確にされたが、この学会は、以下のような問題意識を共有して発足した。

- 1) 『競争』と『自己責任』が強調されている日本社会で、『問題』『困難』に直面している人々、・子どもたちの声を聞くことを、徹底して重視する。
- 2) 地域に根ざし、人々・子どもたち一人ひとりの生活史、・成育史に即して、援助的、・教育的実践のありかたを探る。
- 3) 福祉、医療、心理臨床、教育などの諸分野で子ども・人々のために働いている援助専門家と研究者が、それぞれの専門性を問い直しながら、協働関係を広げ深めていく過程を支える。

さらに、庄井大会事務局長は、学会の研究対象を『子ども・若者・大人・老人の生活（ライフ）に関する理解と、その固有な生存と発達を支えるための総合的な人間理解と発達援助の学問』と定義した。

日本教育史の歴史的な1ページを飾る本学会の第1回研究大会でビバハウス11年の活動を全国の皆さんに報告させて頂いた。これに勝る榮譽はない。

